

聖書：ローマ5：5～11

説教題：神を大いに喜ぶ

日時：2015年8月2日

ローマ人への手紙は5章から第2の区分に入っています。1～4章では信仰義認の教理について語られました。それに続く5～8章では、信仰義認の恵みにあずかったクリスチャンにはさらにどんなに素晴らしい祝福が伴うかが語られています。パウロは前回の1～4節で、信仰によって義と認められた私たちは「神との平和」を持っていますと述べました。私たちは人間関係においても、喧嘩していた誰かと和解し、心の通じ合うコミュニケーションが回復したら大いに喜びます。心に重くのしかかっていたものが取れて、すがすがしい気持ちになり、大きな喜びに包まれます。しかし私たちは今や、何よりも大切な「神との平和」を持つ者とさせられました。また2節に「神の栄光を望んで大いに喜んでいる」とありました。先週見たように、この「神の栄光」とは私たちが将来あずかる栄光を指します。私たちは単に滅ぼされずに天国に入れるというだけでなく、何と神ご自身を鏡に映し出すような素晴らしい栄光の状態へと導かれる。そのことを確信して今から大いに喜ばずにいられない。そして3節には「患難さえも喜ぶ」とありました。普通は苦しいことはない方が良くと思います。しかし私たちは「患難が忍耐を生み、忍耐が練られた品性を生み、練られた品性が希望を生み出す」と知っています。これは「神の栄光」に私たちが達するために是非とも必要なプロセスです。だから喜ぶのです。もし私たちがこのように患難さえも喜びとしたなら、恐いことはもう何もないでしょう。確かにいつも喜んでいることができます。クリスチャンとはそういう人たちなのです。

これを口で言うのは簡単ですが、行なうのが難しい。患難が来ると、私たちはすぐに慌てふためきがちです。そして私は神を信じているのになぜこんなことになってしまったのか、神は本当におられるのだろうか、どこに行ってしまったのか。そして希望は全部吹っ飛んでしまい、私が持っているこの信仰も空しいものではないだろうかと考える誘惑さえ受けます。しかしパウロいわく、大丈夫！クリスチャンの希望は失望に終わらない。なぜならクリスチャンは神の愛を確信しているから、と言います。苦しい中で私たちを支えるのはこの神の愛の確信です。神の愛を確信していないとどうなるでしょうか。患難は私たちにささやきます。「神はお前を愛していない。だからこんな状況に放って置かれているのだ。確かにかつては一時的に良くしてくれたかもしれないが、もうお前は見捨てられたのだ。もうお前は終わりなのだ。だからいつま

でもこんな神を信じるのはやめたらどうか。」と。しかし神の愛を確信している人はどうでしょうか。その人はこう考えます。「この苦しみも、神の愛から出ているものである。これは神が私を将来の栄光へと導き入れるために、すべてを調整して与えてくださった訓練の時なのだ。ここには良い目的があるのであって、ここをくぐることによって神は私の信仰をもっと強くし、もっと祝福してくださる。だから今こそ頂いた信仰の光を輝かせ、一層神に信頼して導いていただこう！」 神の愛が私たちの内に確信されている時とそうでない時とでは、いかに違った反応が私たちから出て来るのでしょうか。その確信がある時、私たちは確かに患難にあっても喜ぶことができます。いやむしろ患難そのものを歓迎して喜ぶという全く信じがたい 180 度転換した生き方が導かれるのです。

では私たちはどうやって神の愛を確信できるのでしょうか。5 節にそれは聖霊によってとされています。聖霊は私たちの心に、「神はあなたを愛していますよー、あなたを愛しているからこの患難も与えて下さっているのですよー」とあかしして下さる。しかも豊かにそうして下さる。5 節の「注ぐ」という言葉は、「あふれるばかりに」とか「圧倒的に」というニュアンスを持っています。改めて教えられることは、私たちはただ自分の力でクリスチャン生活を送っているのではないということです。聖霊が私たちと共にいてくださいます。この方がともにいて私たちをすでに助けてくださっていること、だから今の信仰があること、そしてこれからも助けてくださることに信頼して歩んで行って良いのです。この方によって私たちは神の愛を確信することができますのです。

では聖霊は具体的にはどのようにしてそのことをしてくださるのでしょうか。そのことが 6 節以降に述べられています。聖霊の働きの中心はキリストを指し示すことです。ですから聖霊はキリストを示し、そのキリストにおいて私たちの救いがどんなに確実であるかを示すことによって、神の愛を私たちに注ぐのです。聖霊はキリスト以外の所から恵みを持って来ることはありません。キリストから汲み、キリストから私たちに分配します。ですから聖霊によって神の愛を注がれたいと思う人はキリストへと目を向けなければなりません。そのキリストにおいて神が何をなされたのかに目を向けなければなりません。その時に聖霊は私たちの心の目を開き、上からの理解力を与えて下さって、神の愛を豊かに私たちに注いで下さるのです。

ではそのキリストにおいて神の愛はどのように示されているのでしょうか。まず神の愛はご自身の一人子を私たちのためにささげ下さったことに示されています。愛の大きさはどれほどの犠牲を払ったかに現わされるものです。たとえば男性が女性に指

輪を贈る時も、いくら愛していると口で言ったり、心からささげますと言っても、あまりに値段が安いものを贈ったのでは、本当に私を愛してくれているの？と疑われるということが起きる。愛はやはりどれだけ進んで犠牲を払おうとしたかと関係します。そしてイエス様がこう言われた言葉が思い起こされます。「人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」いのちを与えることはすべてを与えることであって、確かにこれ以上に大きな愛はありません。そして神はまさにこのことをされました。永遠の昔からのご自身の唯一の御子を与えてくださいました。ご自身にとってこれ以上はない犠牲を払ってくださいました。ここに神の驚くべき愛が示されています。

これとセットで考えるべきは、これが誰に与えられたのかということです。6節に「私たちがまだ弱かったとき」とあります。これは8節の「私たちがまだ罪人であったとき」と並行関係にありますから、同じ意味です。このことを良く思い巡らす時に、私たちは神の愛についてさらに驚かずにいられません。そのことを効果的に示すためにパウロは7節の言葉を間にはさんでいます。「正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。」正しい人とは、落ち度がなく、品行方正な人のことです。そういう人は立派な人ですが、だからと言ってその人のために命を捨てようとする人はまずいません。一方、情け深い人のためなら進んで死ぬ人がいるかもしれません。しかし「私たちは」神の前に正しい人でもありませんし、情け深い人でもありません。私たちは不敬虔な人間であり、罪人です。ところが神はそんな者のために、最大の犠牲を払ってくださったのです。

「私たちがまだ罪人であったとき」とは、私たちがまだ罪の中であって神を認めず、神に逆らって生きていた時ということです。神が私たちを愛してくださったのは、私たちが回心した後ではありません。あるいは罪の中で少しは自分を反省して神に心を向け始めた時に、でもなかった。むしろ神を無視し、自分のやりたいように生き、自己中心の罪の道を突進していた時に、ということです。一体こんな者たちのために誰が命を捨てようと思うのでしょうか。しかし神はこんな一点も良いところがない私たち罪人を愛して、キリストを送り、私たちのために十字架に付けてくださった。ここに神の私たちへの愛が示されています。

このことから、私たちがこれまで見て来た信仰義認の教えとセットで下すべき結論は何でしょうか。まず9節：「ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」 私たちはパウロが述べている素晴らしいメッセージを理解できるでしょうか。私たちがまだ

罪人であった時、すなわち神を信じず、神に反抗して歩んでいた時に、神はキリストをささげるほどに愛してくださった。しかし今や私たちはキリストにあつて神の前に義と認められています。であるなら神がその私を良きに導かないはずはない！最悪の状態にあった私たちを神が愛してくださったなら、まして今や義と認められた状態の私たちについては確実に栄光の救いへ導いてくださるということです。患難が与えられたからと言って、このことを疑うのは不合理の極み、あり得ない結論であるということです。10節も同じです。「もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。」以前の私たちは神と敵対関係にありました。聖なる神から見て、私たちは怒りを下すべき存在、さばきを下すべき存在でした。しかしそんな敵のために神が御子を与え、その死によって和解を与えてくださったなら、どうして今や和解に導かれた私たちが、神により愛されなくなるというようなことなど起き得るでしょうか。今や神と正しい関係にある私たちに、神はいよいよ愛を注いでキリストにある満ち満ちたいのち、栄光の救いに生かしてくださるのは疑い得ない確実中の確実なことと言うべきではないかということです。私たちはこのことを苦難の中で考えるべきなのです。苦しい状況に置かれて絶望しそうになり、もうダメだ！と思ってしまいそうな時に、「ちょっと待てよ」と考える。罪人であった時に、あれほど大きな愛を示して下さった方が、どうして今や神と正しい関係にある私を愛さなくなるはずがあらうか。むしろ事実はその反対である。ここまで愛によって導いてくださった神は、今や義と認められた私を間違いなく栄光へと導いてくださる。これ以外のことはあり得ない！このように神の愛の確信が私たちの根底にしっかりある時、患難を前にしても私たちの心は奮い立たせられるのです。また私たちが自分の頭でそう考えるだけでなく、5節で見た通り、聖霊がこのことを助けて下さるのです。

11節：「そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。」これは5章1節から見て来たことが到達する結論と言えます。私たちは神の前に義と認められたことを喜び、神との平和を喜び、将来の栄光を先取りして喜びます。またそのための患難も喜び、そこから導かれる一つ一つの導きも喜びます。しかし何よりもそういう時の私たちの心に満ちているのは神を喜ぶ喜びです。私たちを恵みによってここまで導き、これからも将来の栄光に至るまで確実に導いてくださるのはこの神様です。すべてのことはこの神から発し、神によって成り、神に至ります。この神を思うと喜ばずにいられない。言い知れぬ喜びが湧き上がって来て、私の人格を慰め、この世で

味わったことがない深い喜びに満たしてくださる。そのように神を大いに喜ぶ時、私たちはもう大丈夫でしょう。神は私を愛してくださっています。その方が最も賢い知恵ときよい摂理の御手をもって、これからも私を導いてくださいます。後は私はこの方に信頼し、感謝し、賛美しながら従って行くだけです。

患難の中で私たちが思いを向けるべきは、聖霊がともにいて助けてくださるということ。またその聖霊の導きを受けるために聖書を通してイエス・キリストを見つめること。そしてそこにご自身を現わしておられる神を仰ぐこと。また今や義と認められた自分であることを感謝して受け止めること。そうするなら、私たちの前には素晴らしい展望のみがあることを知ります。やがての栄光のゴールに入ることが確実であることを思って大いに喜ぶことができます。そのための患難さえも信仰によって喜ぶことができます。そして何よりもキリストにあって和解を成り立たせ、すべてを導いてくださっている神を大いに喜ぶ者とさせられます。この神に信頼し、お委ねするところから、平安と励ましと力を頂いて、神が定めた最善のコースを一層の賛美と祈りをもって歩むように導かれて行くのです。